

「はい、できたわよ」

背後の姉の政子の一言に、弟は鏡をのぞき込んだ。

鏡の中には初めて見る自分の姿が映っていた。童髪ではなく、髪を上げて髻を結った姿。

まるで自分ではないみたいだ、と戸惑う弟の背後で、政子は道具を取り片づけながら、説教を始めた。

「ほんとにもう、長さが足りてよかったわ。元服は明日だったのに、今日切ってしまうなんて、あなたは何考えてるの」

そう、明日がこの弟の元服。髪を上げて烏帽子親に烏帽子をかぶせてもらい、一人前の武士として認められる晴れの、大切な式である。嫡男である兄の三郎宗時のときほどではないが、それでも烏帽子親になる叔父の三浦次郎義澄をはじめ、たくさんの親類縁者がこの北条にやってくる。

その前日に、髪を切ってしまったのである。慌てた姉が試しに髻を結ってくれて、足りるのにはほつとしたが説教されるのも無理はない。しかし弟にも言い分がある。

「……………だって」

「だって？」

振り向いた姉がずいといと迫る。弟は思わずのけぞった。この姉の、この表情でにじり寄られたら、勝てるわけがない。これはもう、子供の頃からの刷り込みだ。

「三浦のが、切っておくもんだって……父上に、あ、三浦の叔父上のことだけど、手間かけさせては、わるいって」

(……あの、三浦のくそ餓鬼いっ)

政子は内心だけで、問題の根源である三浦の息子を罵った。あの才気煥発の坊主は、ちょうど同じ年頃で母が姉妹である従兄弟同士ということもあって、子供の頃からこの弟と遊び仲間なのだが、政子を見ると、どうも、このおっとりした弟を遊び道具にしているふしがある。

「そんなわけではないでしょう。当日にちゃんと切るの」

そう指摘されて、弟はびっくりまなこになった。

「そうなの？」

「そうよ」

そういうと、政子は弟の正面に座った。

「あんたねえ。なんでもかんでも『三浦ののいうとおりだ』と思わない方がいいわよ」

そういわれて弟は、一瞬、何を言われているのかわからない、といたげに目をぼちくりさせた。

「そうなの？」

「そうよ」

ここぞ、とばかりに政子は詰め寄った。もう一人前になるのだからしっかり釘を刺しておかねば。

「この件だって、あんたをからかったのよあいつ。それであやうく、元服に髻が結えなくなるところだったじゃない」

だがそういわれて弟は、ふにやりと笑った。

「……そうかあ」

「何がおかしいのよ」

思わずとがった政子の声に、弟はううん、とかぶりを振るといった。

「いや、あいつ、おれがうらやましかつたのかあつて」

思いも寄らない弟の言葉に、政子は目を丸くした。弟はのんびりと続けた。

「おれのほうが一足先に元服して、しかも烏帽子親になるのはあいつの父上。あいつ、あれで父上が大好きだからなあ……」

それじゃあしょうがないなあ、と笑う弟に、政子は眉間を押さえた。明日には一人前の武士になるというのに、この弟はこんなお人好しな調子でやっていけるのだろうか。

そんな姉をよそに、弟は再び鏡をのぞき込んだ。

「姉上」

「なに」

政子が顔を上げると、不思議そうに初めて結われた髻を触っている弟の姿があった。

「これ、大切なところなの？」

「そうよ」

政子はうなずいた。

「いつもは烏帽子の中で、人には見せない、大切なところよ」

「ふううん」

わかったようなわからないような返事をする、弟は振り向いた。

「では、ここの色は？ 決まっているの？」

弟が指さしたのは、髻を根元で縛っている元結だった。

「元服の時はその色だけど、決まっていはいないわね」

政子は戸惑いながらも答えた。

「人に見せないところだから、好きな色とか、大切な色にするものよ」

「ふうん」

弟は再び鏡の中の自分に向き直った。そんな弟に政子は改まって声をかけた。

「さあ髪を戻すから、それが終わったらもう寝なさい。明日は早いわよ」

「烏帽子は」

「それは明日。三浦の叔父上のお役目よ。今日結ったのだから、本当は叔父上のお役目なんだから」

「わかりました」

弟は鏡の前に座り直した。そして背後に回った姉が鏡の中に映ると、ふんわりと微笑んだ。

「ありがとう、姉上」

翌日、弟は無事元服して、北条小四郎義時となった。